

中学校社会科歴史的分野での明治維新における 政府や人々の努力に気付かせる単元教材の開発

—「岩倉使節団」と郷土の人物「藤井能三」の教材化をめざして—

堀内 和直*・田尻 信一

(2006年8月31日受理)

Constructing a Unit of History in Junior High School which Makes Aware of the Efforts of the Government and the People in the Meiji Restoration Period :

To Make Teaching Materials of “Iwakura Mission” and a Local Person “Nozo Fujii”

Kazunao HORIUCHI and Shinichi TAJIRI

キーワード：中学校，歴史教育，教材開発，郷土

Keywords : Junior High School, History Education, Making Teaching Materials, a Local Area

1 問題の所在

「明治維新は、日本史上最大の歴史変革であり、日本の社会が前近代から近代へ転換する画期であるとともに、それは、政治的変革であるだけでなく、社会的・経済的・文化的変革でもあった。」⁽¹⁾「19世紀には多くのアジア・アフリカ諸国・諸地域は欧米列強の植民地・半植民地となっていく。このような激動の世界情勢のなかで、日本は明治維新という大変革を行って、古い幕藩体制を解体し、近代国家となり、資本主義経済を発達させたのである。」⁽²⁾それは、薩長両藩の下級武士を中心とする維新官僚や豪農商⁽³⁾、民衆⁽⁴⁾といった政府や人々の努力によるところが大きい。

このような歴史的意義をもつ明治維新について、平成10年改訂の中学校社会科学習指導要領では、「明治維新の経緯のあらましを理解させ、新政府の諸改革により近代国家の基礎が整えられたことに気付かせるとともに、人々の生活の大きな変化について考えさせる」⁽⁵⁾とし、内容の取り扱いでは、「『明治維新』については、複雑な国際情勢の中で独立を保ち、近代国家を形成していった政府や人々の努力に気付かせるようにすること。『新政府の改革』については、廃藩置県、学制・兵制・税制の改革、身分制度の廃止、領土の確定を扱うこと」⁽⁶⁾とある。複雑な国際情勢の中、新政府の改革により近代国家を形成していった政府や人々の努力について気付かせるように述べている。なお、「明治維新の経緯のあらまし」について、解説では、「天皇中心の新政府の成立から明治10年ころまでの、政治の動きのあらましや諸改革

を扱う」⁽⁷⁾とある。

しかし、現行の中学校社会科歴史的分野の教科書では、学習指導要領が述べているような明治維新における政府や人々の努力について気付かせる内容になっているとは言えない。また、中学校の歴史教育において、明治維新における政府や人々の努力について扱った先行研究が十分に行われているとも言えない。

そこで、まず、明治維新における歴史教育・歴史研究の現状を整理し、政府や人々の努力に視点を当てた単元「明治維新」の開発を試みたい。そして、富山大学人間発達科学部附属中学校での授業実践を紹介し、今後の展望についても考察したい。

2 明治維新における歴史教育・歴史研究の現状

(1) これまでの中学校社会科学習指導要領の考察

これまでの中学校社会科学習指導要領で、明治維新における「努力」という言葉が登場するのは、昭和33年、44年、52年、平成10年である。昭和30年以前や平成元年では、「努力」という言葉は使われていない。なお、学習指導要領及び指導書での明治維新における「努力」に気付かせる記述については、表1にまとめた。⁽⁸⁾

昭和33年では、独立を保つための努力について考えさせ、身分制度の廃止や廃藩置県など旧制度を破棄して近代化を指向した努力を認めるように述べている。

昭和44年では、内外の複雑な情勢の中で、独立の確保に努め、身分制度の廃止や廃藩置県など政府や国民

* 富山大学人間発達科学部附属中学校

表 1 学習指導要領及び指導書での明治維新における「努力」に気付かせる記述（頁は指導書のもの）

	大項目	指導書の大項目の解説	中項目（内容の解説）	指導書の中項目の解説
S 30 以前	なし	なし	なし	なし
S 33	・「近代化の道筋や、独立を保つための努力、ならびにそれらに伴って起こってきたいろいろな問題についても、国際的視野に立って総合的に考えさせることが大切である」(122頁)	なし	なし	・「身分制度や大名の土地・人民の支配などの旧制度を破棄して近代化を指向した努力などは、十分に認められなければならない」(124頁)
S 44	・「開国と幕府の滅亡、諸制度の改革、富国強兵・殖産興業、文明開化などの学習を通して、明治維新が、内外の複雑な情勢の中で、政府や国民の努力によって比較的短期間に実現したことを理解させる」(181～182頁)	・「開国前後を中心とする幕末期の日本は、内外の情勢がきわめて複雑であったが、政府や国民の努力によって、その難局をのりこえ、比較的短期間に明治維新を実現し、近代日本の成立・発展の基礎を築き上げていった」 ・「明治天皇をはじめ維新の人々や国民が、わが国の独立の確保に努め、諸制度の改革、富国強兵・殖産興業、文明開化などの面で、多大な努力と苦心を払ったことを考えさせる」、「幕末から維新にかけて活躍した人物については、わが国の独立の確保と発展のために払った苦心と努力とを、その人物と時代的背景との関連を考えさせながら理解させたい」(182頁)	・「欧米の思想・文化、技術、諸制度などを積極的に取り入れて、封建的な旧弊を改め、先進国に追いつこうと努力したことを理解させるとともに、学制頒布や当時の人々の風俗のありさまにふれる」(186頁)	・「身分制度の廃止や廃藩置県など、旧制度を破棄して、近代化を指向した努力などは、その時代的背景のうえに立って、じゅうぶんに認められなければならないであろう」(184頁) ・「明治初年に政府が開国和親の国策を立て、欧米の進んだ文化を輸入しようと考えて、外国人教師を招いたり留学生を派遣したりして積極的に封建的な旧弊を改め、努力したことを理解させる」(186頁)
S 52	・「わが国の独立の確保と国家の発展に尽くした維新当時の人々の努力、生活文化面における西欧化と伝統文化との関わりなどに着目させる」(93頁)	・「この項では、幕府の滅亡と新政府の成立、明治新政府の事業を中心に学習するのであるが、ここでは特に『維新当時の人々の努力』と『生活文化面における伝統文化とのかかわり』に着目させることが示されている」とあり、「幕末維新时期という政治的・社会的・思想的転換期にあっては、歴史を動かしていく人物に目を向け、歴史における人間の主体性を理解させることが特に必要となる」とある。(93頁)	・「欧米の思想、技術、諸制度、生活様式などを積極的に取り入れ、欧米諸国に習った近代社会をつくることに努めたこと及び政府の富国強兵・殖産興業の政策によって近代工業が育成されたことを理解させる」(95頁)	
H 元	なし	なし	なし	なし
H 10	なし	なし	・「明治維新の経緯のあらましを理解させ、新政府の諸改革により近代国家の基礎が整えられていったことに気付かせるとともに、人々の生活の大きな変化について考えさせる」(104頁)	・「『明治維新』については、複雑な国際情勢の中で独立を保ち、近代国家を形成していった政府や人々の努力に気付かせるようにすること」(104頁)

の努力によって近代日本の成立・発展の基礎が築き上げられていったことを理解させるとともに、当時活躍した人物の努力や欧米の進んだ文化を取り入れようと努力したことを理解させるように述べている。

昭和52年では、独立の確保と国家の発展に尽くした維新当時の人々の努力に着目させ、歴史を動かしていく人物の役割に目を向けさせるとともに、欧米の文化

や制度を積極的に取り入れ、近代社会をつくることに努めたことを理解させるように述べている。

平成10年では、複雑な国際情勢の中、独立を保ち、近代国家を形成していった政府や人々の努力について気付かせるように述べている。

本節を整理するならば、まず、昭和33年～平成10年（ただし、平成元年を除く）まで、独立の確保と近代

化に向けて努力してきたことに目を向けさせるように述べていることでは一貫している。しかし、昭和44年からは人々の努力にも目を向けさせるように述べており、平成10年には、政府や人々と分けて述べるようになった。⁽⁹⁾ また、昭和44年と52年には、欧米の文化などを取り入れる努力にも目を向けさせるよう述べていることは、今後の教材化を考える上で重要である。

(2) 現行の中学校歴史的分野の教科書の考察
 明治維新の範囲については、現行の学習指導要領の

中項目の解説に『『明治維新の経緯のあらまし』については、天皇中心の新政府の成立から明治10年ころまでの、政治の動きのあらましや諸改革』⁽¹⁰⁾ とある。そこで、新政府の成立から明治10年ころまでの明治維新について記述されている部分で、政府や人々の努力に気付かせる記述になっているか、現行の8社の中学校歴史的分野の教科書⁽¹¹⁾ を取り上げて考察し、表2「現行の中学校歴史的分野の教科書での明治維新における『努力』に気付かせる記述」にまとめた。

表2 現行の中学校歴史的分野の教科書での明治維新における「努力」に気付かせる記述

出版社	本文	側注	特集・コラム
大書	なし	なし	なし
教出	なし	<ul style="list-style-type: none"> ・「東京美術学校（今の東京芸術大学）の設立に力をつくしたフェノロサなどがいました。」（118頁） ・「福沢は中津藩の出身で、後に慶應義塾をひらき、人材の育成にあたりました。」（119頁） 	なし
清水	<ul style="list-style-type: none"> ・「欧米の学問を取り入れることにも力をそそぎ、さまざまな官立の大学を設け、多くの欧米人を教師としてまねいた。」（148頁） 	なし	なし
帝国	なし	<ul style="list-style-type: none"> ・「条約改正を求めた使節団には、さまざまな苦勞がありました。使節団は委任状がないと条約改正の権限がないことを知らず、アメリカからあわてて委任状を取りに戻ったりしました。」（156頁） 	なし
東書	なし	<ul style="list-style-type: none"> ・渋沢栄一について「富岡製糸場の建設をはじめ、多くの企業を設立し、経済の発展に力をつくしました。」（142頁） ・津田梅子について「のちに女子教育の発展に力をつくしました。」（148頁） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「福祉教育につくした人や、その歴史をみていきましょう。」（200頁） ・「石井十次は、1887（明治20）年に、岡山県に孤児院をつくって、孤児の救済に生涯をささげました。」、「宮崎県の茶臼原の原野に施設を移し、子どもたちと開拓を行いながら、教育に努めました。」（200頁）
日書	なし	なし	なし
日文	<ul style="list-style-type: none"> ・「東京大学にきたモースやベルツ、札幌農学校の創設に加わったクラークは、日本の学問や教育に貢献した。」（125頁） 	なし	<ul style="list-style-type: none"> ・「最年少だった津田梅子は、7歳から11年間をアメリカで過ごし、帰国後、英学塾を創立、英語教育を通じて新しい時代に活躍すべき婦人の育成に努めました。」（132頁）
扶桑	なし	なし	<ul style="list-style-type: none"> ・「長岡藩（新潟県）では、戦乱と洪水の被害が重なって、深刻な食糧不足に悩まされていた。」、「親類筋の藩から『米百俵』が見舞いとして送られてきた。」、「藩政の責任者だった小林虎三郎は、一粒の米も藩士に分配せず、将来の人材育成のため、藩の学校を開校する資金に回ってしまった。」（149頁）

現行の学習指導要領の明治維新について扱った中項目の内容及び内容の取扱いには、「気付かせる」ように言っている内容が3つある。1つ目は、近代国家の基礎が整えられていったこと、2つ目は、政府や人々の努力、3つ目は差別が残ったことである。⁽¹²⁾

それぞれ気付かせたい内容のキーワードになる「近代」、「努力」、「差別」（ただし、差別が残っているという内容になっているもののみ）という言葉が教科書に記述されているかを調べてみると、「近代」と「差別」という言葉は8社すべてにあったのに対して、「努力」という言葉は1社もなかった。⁽¹³⁾

ただし、「努めました」と動詞を使っているのは、『東書』と『日文』の2社あった。しかし、『東書』は、石井十次が孤児院をつくったのが1887（明治20）年なので、教育に努めたのはそれ以降であり、『日文』も、津田梅子が英学塾を創立したのは1900（明治33）年である。2社とも天皇中心の新政府の成立から明治10年ころまでのできごとを扱っていないのが残念である。⁽¹⁴⁾

また、筆者の調査によれば、政府の「努力」について記述されているのは『清水』と『帝国』の2社だけであり、人々の「努力」について記述されているのは『教出』、『東書』、『日文』、『扶桑』の4社であった。政府と人々の両方の努力について記述されているところはない。⁽¹⁵⁾

(3) 明治維新についての歴史教育の先行研究の整理

明治維新についての歴史教育の先行研究はいくつか見られる。⁽¹⁶⁾

中学校の歴史教育では、新福悦郎「鹿児島の民衆から見た明治維新」⁽¹⁷⁾、新福悦郎「西郷・大久保のどちらの政策を支持するか」⁽¹⁸⁾、吉永潤「明治鉄道競争物語」（ただし、高校も念頭に置いている）⁽¹⁹⁾、中井清一「これまでの日本・これからの日本」⁽²⁰⁾がある。

また、小学校の歴史教育では、安達弘「歴史人物学習・坂本竜馬」⁽²¹⁾、勝本淳弘「明治維新の原動力—進取の気性に富んだ日本人—三田藩の人々の決断と行動—」⁽²²⁾、斎藤武夫「明治の現実政治家・大久保利通」⁽²³⁾（以下、[斎藤a]）、本宮武憲「漫画でたどる日本近現代史」⁽²⁴⁾がある。

本節では、新政府の成立から明治10年ころまでの政府の努力について取り上げられている[斎藤a]について詳しく見ていきたい。

[斎藤a]は、公民的資質の育成に照らして、小学校の歴史教育で大久保利通を取り上げている。公民的資質の育成は、小・中学校で一貫している社会科学習の究極のねらいである⁽²⁵⁾ことから、中学校歴史教育にも大いに参考になるとと思われる。資料として使われた教材プリントには、大久保利通を「近代国家としての日本の国の力を高めていく仕事」をし、「最後まで日本の国のリーダーとしてがんばり通しました」⁽²⁶⁾

とあることから、努力について扱っていると言えよう。そこで、[斎藤a]が、大久保利通をどのように取り上げることが公民的資質の育成につながると言っているのかを検討していきたい。

[斎藤a]は、社会科の教科目標である「公民的資質の育成」に照らして、近現代史教育における重要なテーマは何かを問いかけ、「近代日本を創った政治家の結果責任を検討し、彼らの資質や能力を彼らが置かれた条件の中で評価していく作業である」⁽²⁷⁾、と言っている。そして、取り上げる政治家について、「権力の中核にいて国家の意思決定に関わり、理想と現実のはざまで苦悩し、可能かつ現実的な政策を実行し、国益という結果責任において検討に値する人物」⁽²⁸⁾であるとし、明治維新では大久保利通である言っている。

[斎藤a]が紹介している2つの教材のうち、取り上げるのは1つ目の「大久保利通の政治家の考え方を検討しよう」⁽²⁹⁾である。

教材プリントではまず、1874年までの大久保利通のやってきたことを、「徳川幕府をたおし、武士の支配する政治を終わらせた。今から見れば不十分なものだが、自由で平等な国民の国をつくった」⁽³⁰⁾としている。次に、ヨーロッパから帰ってきた大久保利通がこれから進めていかなくてはならないと考えている政治を、「イギリスのように、日本を工業の国にして貿易を進めることだ。そして、もうかったお金で国民の生活を豊かにし、イギリスと同じくらい強い軍隊を持つことだ」⁽³¹⁾と言っている。そして、その政治をどうやって進めるかについて、「江藤新平、板垣退助、後藤象二郎」と「大久保利通」の考え方のどちらかを生徒が選択し、その理由を書かせるという授業である。⁽³²⁾

「江藤新平、板垣退助、後藤象二郎」の考え方は、「国民のための国をつくったのだから、国民の考えを政治に生かす仕組みをつくるのはとても大切なことです。そのためにはイギリスのような議会政治をお手本にして、選挙を行うべきだ」⁽³³⁾というものである。

一方、「大久保利通」の考え方は、「どんな正しい仕組みでも、いまの日本がすぐにまねできるとは考えられず、「国の土台ができたばかりの日本には、リーダーが強い国で国民を引っ張っていく政治の仕組みがいいのだ」⁽³⁴⁾というものである。そして、その理由を次のように言っている。⁽³⁵⁾

「いま進めなくてはならない政治の大目標は『日本をヨーロッパの国々と対等な国にする』ことだ。それは決してかんたんなことではない。国民に大きな苦勞やがまんを、お願いしなくてはならないような政治だからだ。

しかし、鎌倉時代から数百年間も武士に支配されてきた日本の国民には日本が自分たちの国だという気持

がまだまだ弱い。日本の政治がいま何をしなければならないかを、理解している国民も大変少ない。

まして、そのために、自分たち一人一人にも責任があると考え、国全体のことを考えられる国民は、ほとんどいないといっている。いまいだろう。

このような国民の意見をいまず政治に生かす仕組みをつくるのは、国のためにも国民のためにもならないのだ。いま何をしなければならぬかをいちばん理解している私たち政治家や役人が、リーダーとなって政治を進めるのが、いまのところいちばんいいのだ。」

最後には、次のように締めくくっている。⁽³⁶⁾

「こうして、大久保は、旅行中の政府で大活躍していた江藤新平や板垣退助たちを追い出し、内務省という役所を作って、そのリーダーになり、強い意志で自分の考える政治を進めていきました。

そして、どれも近代国家としての日本の国力を高めていく仕事でした。大久保はその仕事の全責任を引き受けて、最後まで日本の国のリーダーとしてがんばり通しました。」

[齋藤 a] は、公民的資質の育成に照らして大久保利通を取り上げ、その大久保利通は、いま何をしなければならぬかをいちばん理解している私たち政治家や役人が、リーダーとなって政治を進めるのが、いまのところいちばんいいのだ、と言っている。なぜなら、①日本の政治がいま何をしなければならぬかを理解している国民が大変少なく、自分たち一人一人にも責任があると考え、国全体のことを考えられる国民はほとんどいない、②このような国民の意見をすぐ政治に生かす仕組みをつくるのは、国のためにも国民のためにもならない、からだ。

小・中学校における社会科の学習は、「国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」⁽³⁷⁾ ところに究極のねらいがある。民主的なしくみが今すぐ国民のためにならないからといって、そのような仕組みをつくらず、大久保利通のような政治家や役人が政治を進めるのが今のところいちばんいいのだということになれば、生徒は、国家や社会が民主的でなくてもよい時もあると考えるのではないか。そして、そのように取り上げられた大久保利通を、近代国家として日本の国力を高めていくために最後まで日本の国のリーダーとしてがんばり通した人物であると締めくくると、生徒は、大久保利通のように、民主的な国家・社会にしようとは考えずにがんばる時があってもいいのだと考えるのではないか。そのことが民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養うことにつながるのか、疑問である。

また、齋藤武夫は、『われわれの物語』をどう構想するか—近現代史をとらえ直す視点—⁽³⁸⁾ (以下、[齋藤 b]) で、「まず黒船来航1853年から日露戦争1904年までの歴史を、もっと肯定的に読みたい」⁽³⁹⁾ ので、「大久保利通や伊藤博文らに光を当て、彼らの『公』に対する志の高さをきちんと教えなくてはならない」⁽⁴⁰⁾ し、「明治維新を、帝国主義の時代の中にしっかりと据えて眺めなくてはならない」⁽⁴¹⁾ と言っている。そして、「日本は帝国主義列強の中で懸命に生きてきた。その時その時の政策選択は、自国の存亡をかけて、強いられる条件の中で行われたのである」⁽⁴²⁾ と言っている。

藤岡信勝は、『戦争の授業』のパラダイム転換をどうはかるか—本誌創刊号の道案内をかねて—⁽⁴³⁾ で、「最も重要な観点として強調したいのは、自国に対する肯定的なイメージに裏付けられた授業でなければならないということである」⁽⁴⁴⁾ とし、肯定的な自国のイメージが生まれるポイントを示しているのが、[齋藤 b] であると言っている。

しかし、木畑洋一「帝国主義の時代に植民地支配は当然だったのか」⁽⁴⁵⁾ のように、「明治日本の踏み出した道は、与件としての国際環境である帝国主義への対応として性格づけるものではなかった。強調すべきは、日本自体が帝国主義の時代を作り出していく大きな要因となったという点である」⁽⁴⁶⁾ という意見もある。

(4) 努力の扱いについての考察

現行の中学校学習指導要領における努力の扱いについて、次のように考える。

まず第1に、社会科学学習の究極のねらいである「国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」⁽⁴⁷⁾ ことをふまえていることである。政府や人々の行っていることが、民主的、平和的な国家・社会を形成しようしていると生徒が感じられるかを考える必要があるだろう。生徒が、国家や社会が民主的でなくてもよい時もある、または明治時代における日本の帝国主義的な政策選択は強いられる条件だから仕方ないのだ、と考えてしまうような内容であってはならない。

第2に、政府や人々の行っていることが、近代国家形成につながる「国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くし」⁽⁴⁸⁾ ている内容であるかということである。その際、自らの生き方とかかわらせて考えさせるために、歴史を具体的なものとして実感できることが必要である。

国家や社会及び文化の発展に尽くしていることが自分の使命であり、その使命に熱意をもって取り組んでいる姿に気付かせることが、努力に気付かせることではないか。つまり、新政府の成立から明治10年ころまでの短期間に、近代国家形成のため、政府や人々が自分の使命に熱意をもって取り組んでいる姿に気付かせ

ること、そして、取り組んでいることが、民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養うことをふまえていること、それが政府や人々の努力に気付かせることではないかと考える。

3 政府や人々の努力に視点を当てた単元「明治維新」の開発

(1) 日本史における明治維新の位置づけの整理

本節では、日本史における明治維新の位置付けについて、研究史を整理する。⁽⁴⁹⁾ 新政府の成立から10年ほどの短期間にトータル・レボリューション（全般的革命）とでもいえる大きな変化が日本に起こった。

1867年の戊辰戦争、1869年の版籍奉還、1871年の廃藩置県によって、封建的割拠体制から近代的中央集権体制へ転換していった。そして、1873年の地租改正や1873～77年にかけての秩禄処分によって、近代的な土地改革が行われた。

対外的には、1871～72年の条約改正の予備交渉や欧米視察などのための岩倉使節団の派遣、1871年の清と対等な日清修好条規の締結、1874年の近代日本最初の軍事行動である台湾出兵、1875年の樺太全島をロシア領、千島列島全島を日本領と定めた樺太・千島交換条約の締結、1875年の朝鮮の砲台を占領した江華島事件、1876年の朝鮮に不平等な日朝修好条規の締結などが行われた。

また、1871年の選民廃止令、1873年の徴兵令、1876年の帯刀禁止令などによって封建的な身分差別は制度上なくなった。1872年の太陰暦の廃止及び太陽暦の採用は、国民の日常生活のリズムを大きく変化させていった。

1872年の新橋・横浜間の鉄道の開通や官営模範工場である富岡製糸場の開業などは、日本の資本主義化を急速に進めていった。

1872年の学制発布は、初等教育の重視、個人主義、実用主義的教育観、男女同一の教育、全国統一的学校制度などこれまでにない画期的なものであった。

このような変化は、薩長両藩の下級武士を中心とする維新官僚や豪農商、民衆といった政府や人々の努力によるところが大きい。

「かれら下級武士は、窮迫する藩財政のしわ寄せをうけて生活苦にあえぎ、封建制の崩壊を実感しており、優れた才能をもつ者は、厳しい身分制度の枠にしばられて能力を発揮できないため、変革への意欲をもちやしていた。外圧を契機とする政治的激動は、かれらが藩政の中核へ進出する機会となり、そのなかから討幕派のリーダーとなりやがて維新官僚へと転身」⁽⁵⁰⁾ していった。また、豪農商は、維新官僚に協力しつつ、外圧に耐えて独立を全うできる権力と経済力を作り出すという課題をはたしていった。なお、民衆が政府に協

力して初等教育制度を急速に普及させているなど、民衆の努力も見逃せない。⁽⁵¹⁾

ただ、「政治的近代化＝民主化がひどく立ちおくれたままになった事実と、その結果きわめてはやくから対外侵略がはじまる事実を、われわれは同時にしっかりと直視する」⁽⁵²⁾ 必要がある。

(2) 単元「明治維新」の開発

このように、さまざま問題を抱えつつも歴史的意義のある明治維新の学習について、政府や人々の努力に視点を当てて、単元「明治維新」の開発を試みる。その際、次の4点に注意したい。

1つ目は、政府あるいは人々のどちらかだけを取り上げるのではなく、両方を取り上げることである。明治維新は、維新官僚のような政府だけで進めていたのではなく、豪農商や民衆といった人々も協力していたということに気付かせたい。

2つ目は、民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養えるようにすることである。政府や人々の行いが、民主的、平和的なものにつながらない内容は取り上げないようにしたい。

3つ目は、人々の例として郷土の人物を取り上げるということである。明治維新をより身近なものに感じることができるようになりたい。

4つ目は、自分の使命に熱意をもって取り組む姿が生徒に伝わるような内容にすることである。

政府の努力の例としては、岩倉使節団を取り上げる。岩倉使節団は、右大臣岩倉具視を特命全權大使とし、1871年11月から1年10か月にわたって総勢107名が欧米諸国に派遣された使節団である。目的は、大きく分けて3つある。1つ目は、条約締盟国を歴訪して、元首に国書を捧呈し、聘問の礼を修めること、2つ目は、欧米先進諸国の制度・文物を親しく見聞して、その長所を探り、日本の近代化を進めること、3つ目は条約改正の予備交渉をすること―以上である。中には、参議木戸孝允や大蔵卿大久保利通といった明治新政府の実力者も多く含まれていた。日本史の中で、政府の実力者がこれほど多く海外に派遣された例はない。近代国家形成という国家的使命への熱気が感じられる。⁽⁵³⁾

人々の努力の例としては、郷土の人物である藤井能三を取り上げる。藤井能三は、富山県初の公立小学校である高岡市立伏木小学校建設に力を尽くした郷土の人物で、生徒にとっても身近に感じやすいと思われる。学制が発布されたばかりで、反対を唱える人々がいたにもかかわらず、改革実現に向けて力を尽くした藤井能三を取り上げることで、中央政府だけでなく地方の人々も改革に向けて力を尽くしていったことに気付かせたい。⁽⁵⁴⁾

(3) 単元「明治維新」の目標と指導計画

単元「明治維新」では、目標として、生徒に次の5点を習得させることを目指す。

- ① 新政府の改革について興味をもつ。
- ② 新政府の改革の内容を理解する。
- ③ 江戸時代と比較して人々の生活の変化を読み取る。
- ④ 新政府の改革について政府が努力していたことに気付く。
- ⑤ 新政府の改革について人々が努力していたことに気付く。

また、本単元の配当時間は9時間とし、以下のような構成とする。

- 第1次 〈導入〉新政府の改革
 第2次 新政府の改革の内容
 第3次 〈話し合い〉三条実美の岩倉使節団への思いを考え、話し合う
 第4次 〈手紙作成〉藤井能三へ手紙を書く

本単元の全体像を示すため、9時間の指導計画を、表3「単元『明治維新』の指導計画」としてまとめた。

4 富山大学人間発達科学部附属中学校での授業実践

単元全体ではないが、郷土の人物である藤井能三を教材化し、人々の努力に気付かせる授業実践を紹介する。

(1) 実践の内容

次のような流れで授業を行った。

- ① 説明資料と教師の解説をもとに藤井能三の経歴、学制の大まかな内容、学制にまつわる藤井能三のエピソードを知る。
- ② 藤井能三がどんな思いで活動に取り組んだかを想像しながら、手紙を書く。

表3 単元「明治維新」の指導計画

時	小 単 元	学 習 の 目 標	学 習 活 動
1	第1次 〈導入〉 新政府の改革	・生徒は、新政府の改革について興味をもつ。	○新政府がどんな改革を行っていったのかを予想し、改革の内容とその理由について話し合う。 ○授業を通して疑問に思ったことや知りたいこと、調べてみたいことをノートに書く。
2 ・ 3 ・ 4 ・ 5	第2次 新政府の改革の内容	・生徒は、新政府の改革の内容を理解する。 ・生徒は、江戸時代と比較して人々の生活の変化を読み取る。	○1869年～71年にはどんな改革を行ったのか、廃藩置県、身分制度の廃止を中心にまとめる。 ○1872年～73にはどんな改革を行ったのか、学制、兵制、税制の三大改革を中心にまとめる。 ○産業や文化の近代化はどのように進んだのか、殖産興業や文明開化を中心にまとめる。 ○新政府の外交はどのように行われたのか、領土の画定を中心にまとめる。
6 ・ 7	第3次 〈話し合い〉 ・三条実美の岩倉使節団への思いを考え、話し合う	生徒は、新政府の改革について政府が努力していたことに気付く。	○当時の日本の状況や岩倉使節団の日程、三条実美が岩倉使節団出発前に送った送別の辞を参考に、三条実美がどんな思いで岩倉使節団を送り出したかを考え、考えとその理由をノートにまとめる。 ○考えとその理由について話し合う。 三条実美は、出発前の岩倉使節団に次のような送別の辞を送っている。 ⁽⁵⁵⁾ 外国とのつきあいは国の興亡に関わり、この使節派遣がうまくいくかいかないかは国の名誉に関わります。今や日本の政治が新しくなり、海外の各国に並び立つ時にあります。外交や国内の政治など、この先の大事業がうまくいくかいかないかは、まさにこの使節派遣にかかっています。それほど大事な使命なのです。優秀で国家にとって大事なみなさんは、協力してこの使命を果たしてほしい。私達は、よい結果が出るのはそう遠くないと思っています。名声を世界に示し、無事に帰国することを願っています。
8 ・ 9	第4次 〈手紙作成〉 ・藤井能三へ手紙を書く	・生徒は、新政府の改革について人々が努力していたことに気付く。	○藤井能三の経歴や学制との関わりを知り、藤井能三がどんな思いで活動に取り組んでいたかを想像しながら、手紙を書く。 ○一人ひとりが前に出て自分の書いた手紙を発表し、最後に感想を書く。

前書き、後書きなど形式的なものは省き、内容のみを書くように指示した。また、2006年の今の自分としての立場で書くように指示した。

- ③ 一人ひとりが前に出て、自分が書いた手紙を発表する。
- ④ 授業を終えての感想を書く。

説明資料と生徒が実際に書いた手紙については、資料1「説明資料と生徒の手紙の例」で紹介する。



写真1「手紙を書く様子」

(2) アンケート結果(2006年7月14日実施
2年4組 39名中37名回答)

A 資料を見て手紙を書き、発表し、友だちの発表を聞くという一連の活動を通して、藤井の活動についてどんな風感じましたか

- ア 日本や郷土のために大変力を尽くしてがんばっている……………33人
- イ 日本の郷土のために力をつくしてがんばっている……………2人
- ウ 自分勝手なことをやっている……………0人
- エ 全く自分勝手なことをやっている……………0人
- オ その他(ただし、アを兼ねる)……………2人

B 資料を見て手紙を書き、発表し、友だちの発表を聞くという一連の活動について感じたことを自由に書いてください。(ア～クの記号は整理の都合上付けたもので、実際のアンケートには選択肢はない)

- ア 藤井能三さんはすごい……………17人
- イ おもしろい・楽しい・よかった……………13人
- ウ 藤井能三を身近に感じた……………1人
- エ 歴史をもっと知ることができた……………1人
- オ 大変だった
(死んでしまった人を書くので)……………1人
- カ もっと詳しい情報が知りたい……………1人
- キ 特になし……………1人
- ク 無回答……………2人

(3) アンケートの考察

Aについては、全員がアまたはイと答えていることから、藤井能三の教材による一連の活動を通して、生徒は人々の努力に気付いたようである。ただ、設問がやや恣意的な面もあるので、今後、「気付かせる」ということをどのように検証していけばよいのか、課題である。

Bについては、自由に書いてもらう形式ではあるが、「藤井能三さんはすごい」と藤井能三の努力について書いているものが多かった。例えば、「日本のためにお金を払ったり力を尽くしたりすることはすごいことだと思いました」、「藤井能三さんの子供たちに教育をさせたいという気持ちはすばらしい」である。また「かげでも、日本を支えている人がいることが分かった」と政府の取り組み以外にも努力している人がいるということの評価する感想もあった。

5 今後の展望

授業実践では、ほとんどの生徒が、明治維新において郷土の人物である藤井能三が近代国家建設の大きな柱の1つである学制改革の推進に大変努力したことに気付いたようである。このことから、郷土の人物である藤井能三の教材化は、明治維新における近代国家建設が、政府だけでなく豪農商や民衆といった人々の努力で進められていったことや身近な郷土にも努力した人がいたことを生徒に気付かせる上で、大きな意義があったといえる。

ただ、アンケートに「もっと詳しい情報が知りたい」という感想があるように、郷土の人物である藤井能三の教材化が十分にできたとは言いがたい。学校ができたころはまだまだ一般の人々から大きな支持をうけることができず、学校よりも寺子屋へ行けばいいと考えている人も多かったようだ。そういった側面をもう少し取り上げてもらえばいいのではないか、と考える。

また、小学校の歴史学習が通史にならないようにしていること、そして高等学校では日本史を学ばない生徒もいるということを考慮すると、中学校における歴史学習では通史的な学習が求められることになる。⁽⁵⁶⁾ その意味で、他の単元の授業時間数も考慮に入れて本単元を構成する必要がある。ただ、「国際化の中で近現代史の重要性が指摘されて」⁽⁵⁷⁾ おり、近現代史の導入にあたる本単元の学習に十分な時間をかけることは意義のあることであると考えられる。

【注】

- (1) 中村哲『日本の歴史⑩ 明治維新』集英社 1992年 8頁
- (2) 同上 13頁
- (3) 石井寛治『大系日本の歴史⑫ 開国と維新』小学館 1993年 18～22頁
- (4) 前掲書(1)「京都の下京第11区(現在の成徳小学校)では1875～76年にかけて校舎が建設された」が、「費用の負担ばかりでなく、地固めのために児童・住民が総出で働いてい」た。(137～138頁)
- (5) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—社会編—』大阪書籍 平成16年一部補訂 104頁
- (6) 同上 104頁
- (7) 同上 104頁
- (8) 以下のものを参照した。
 - ・文部省『中学校社会指導書』実教出版 昭和34年(表1では、『S33』)
 - ・文部省『中学校指導書 社会編』大阪書籍 昭和46年(表1では、『S44』)
 - ・文部省『中学校指導書 社会編』大阪書籍 昭和53年(表1では、『S52』)
 - ・前掲書(5)(表1では、『H10』)なお、小学校の学習指導要領にも努力の記述が見られるが、地理的分野や公民的分野の記述である。
- (9) 昭和33年にも人についての記述はあるが、「苦心」という言葉が使われている。44年にも登場し、「努力」と並列で用いられることもあり、ほぼ同義と思われる。しかし、本節では、より厳密に考察することを優先して除外した。
- (10) 前掲書(5) 104頁
- (11) 教科書は以下のものを参照した。(出版社名でアイウエオ順に列記)
 - ・鈴木正幸他『中学社会 歴史的分野』大阪書籍 2005年(以下、『大書』)
 - ・笹山晴生他『中学社会 歴史 未来をみつめて』教育出版 2005年(以下、『教出』)
 - ・大口勇次郎他『新中学校 歴史 改訂版 日本の歴史と世界』清水書院 2005年(以下、『清水』)
 - ・黒田日出男他『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き(改訂版)』帝国書院 2005年(以下、『帝国』)
 - ・五味文彦他『新編 新しい社会 歴史』東京書籍 2005年(以下、『東書』)
 - ・峯岸賢太郎他『わたしたちの中学社会 歴史的分野』日本書籍新社 2005年(以下、『日書』)
 - ・大濱徹也他『中学校の社会科 日本の歩みと世界歴史』日本文教出版 2005年(以下、『日文』)
 - ・藤岡信勝他『中学社会 改訂版 新しい歴史教科書』扶桑社 2005年(以下、『扶桑』)
- (12) 前掲書(5) 104頁
- (13) 前掲書(11) 参照
- (14) 表2 参照
- (15) 表2 参照。ただし、『東書』については特集で、福祉教育に尽くした人の例に政府の取り組みも紹介されている。しかし、取り組みを紹介しているだけで、政府の努力に気付かせるような記述にはなっていない。また、取り組みの時期は大正時代以降のものであり、明治維新の時期に行われたことよりは福祉教育に重点を置いたものとなっている。(『東書』200頁参照)
- (16) 以下の目録を参照した。
 - ・日本社会科教育学会編『社会科教育文献目録 第3集:1980～1989』日本社会科教育学会 1990年
 - ・日本社会科教育学会編『社会科教育文献目録 第4集:1990～1999』日本社会科教育学会 2000年
- (17) 新福悦郎「鹿児島の人々から見た明治維新」『歴史地理教育』474 1991年 22～29頁
- (18) 新福悦郎「西郷・大久保のどちらの政策を支持するか」『「近現代史」の授業改革3』明治図書 1997年 28～34頁
- (19) 吉永潤「明治鉄道競争物語」『「近現代史」の授業改革3』明治図書 1997年 34～39頁
- (20) 中井清一「これまでの日本・これからの日本」『「近現代史」の授業改革3』明治図書 1997年 70～74頁
- (21) 安達弘「歴史人物学習・坂本竜馬」『「近現代史」の授業改革3』明治図書 1997年 10～15頁
- (22) 勝本淳弘「明治維新の原動力—進取の気性に富んだ日本人—三田藩の人々の決断と行動—」『「近現代史」の授業改革3』明治図書 1997年 16～21頁
- (23) 斎藤武夫「明治の現実政治家・大久保利通」『「近現代史」の授業改革3』明治図書 1997年 22～27頁
- (24) 本宮武憲「漫画でたどる日本近現代史」『「近現代史」の授業改革3』明治図書 1997年 64～69頁
- (25) 前掲書(5) 20頁
- (26) 前掲書(23) 24頁
- (27) 前掲書(23) 22頁
- (28) 前掲書(23) 22頁
- (29) 前掲書(23) 23～25頁
- (30) 前掲書(23) 24頁
- (31) 前掲書(23) 24頁
- (32) 前掲書(23) 23頁
- (33) 前掲書(23) 24頁
- (34) 前掲書(23) 24頁
- (35) 前掲書(23) 24頁

- (36) 前掲書(23) 24頁
- (37) 前掲書(5) 20頁
- (38) 斎藤武夫『『われわれの物語』をどう構想するかー近現代史をとらえ直す視点ー』『『近現代史』の授業改革1』明治図書 1995年 5～11頁
- (39) 同上 7頁
- (40) 同上 7頁
- (41) 同上 8頁
- (42) 同上 8頁
- (43) 藤岡信勝『『戦争の授業』のパラダイム転換をどうはかるかー本誌創刊号の道案内をかねてー』『『近現代史』の授業改革1』明治図書 1995年 12～16頁
- (44) 同上 15頁
- (45) 木畑洋一「帝国主義の時代に植民地支配は当然だったのか」『近現代史の真実は何か』大月書店 1996年 37～44頁
- (46) 同上 40頁
- (47) 前掲書(5) 20頁
- (48) 前掲書(5) 116頁
- (49) 前掲書(1)・(3) 参照
- (50) 前掲書(3) 18～19頁
- (51) 前掲書(1) 240頁
- (52) 前掲書(3) 22頁
- (53) 田中彰『岩倉使節団「米欧回覧実記」』岩波書店 1994年 1～44頁
- (54) 藤井能三の教材化にあたっては、以下のものを参照した。
- ・『立山を仰いで』富山県教育記念館 1981年
 - ・『郷土に輝く人びと』富山県、富山県青少年活動実践協議会 1968年
 - ・高岡市立伏木中学校他編『藤井能三伝』藤井能三顕彰会 1965年
 - ・伏木小学校史編さん委員会編『伏木小学校史』高岡市立伏木小学校 1973年
 - ・古岡英明「人物を中心とする日本史の学習指導に関する研究ー郷土史に登場する人物の『生きざま』の探求」『富山市教育センター研究紀要』183 1977年
- (55) 前掲書(53) 44頁参照。
- (56) 佐伯真人 大杉昭英 澁澤文隆『新中学校教育課程講座 社会』ぎょうせい 2000年 117頁
- (57) 同上 109頁

付記：藤井能三については、文献では「ふじいのうそう」となっているが、地元（高岡市伏木地区）においては、一般的に「ふじいのうそう」と呼ばれている。